

付度の空気 官から社会へ

写真は朝日新聞 5 月 20 日朝刊「長期政権の磁界 1」から。安倍政権を支える、中核メンバー全員がそろった写真を初めて見た。よく聞く名前も多いが、安倍首相の最側近の連中だ。なんだか、同じようなタイプの人物ばかり並んでいるようだ。

このなかで、菅官房長官は例の改元騒ぎによりポスト安倍の有力候補に躍り出たようだ。あの陰険で、狡猾な菅なる者がなぜ?と疑問が尽きないが、これも安倍首相への付度によるものだろう。関心あるテーマなので抜粋して紹介したい。



官邸に刃向かう官僚に対する容赦ない攻撃もあった。加計学園問題をめぐる「総理のご意向」と書かれた文科省作成の文書の存在を認めた前川喜平・元文科事務次官。菅氏は記者会見で、前川氏が天下り問題で次官を引責辞任した経緯を持ち出し、「地位に恋々としがみついていた」と徹底的に批判した。

18 年 10 月、藤原誠・文科事務次官は、着任時の職員向けのあいさつで「面従腹背はやめましょう」と呼びかけた。「従うように見せながら内心は反抗する」を意味する面従腹背は、前川氏の座右の銘。官邸に刃向かったかつての上司を皮肉り、恭順を示すあいさつだった。官邸が霞が関の人事権をちゅうちょなく振るい、長期政権となった今、官僚が率先して官邸の意をくもうとしている。

長期政権という磁力に吸い寄せられ、官僚たちが付度する空気。社会にも、別の形で徐々に広がっているような事象がある。昨年、山口県下関市や広島市で、地元の教育委員会が前川元文科次官の講演会に関する後援依頼を断った。広島県教委はその理由について、「政権批判を繰り返してきた前川氏が前面に出ており、中立ではない」とした。安倍政権が目指す憲法改正をめぐって、金沢市は市庁舎前の広場を「護憲集会」に使うことを「特定の政策や意見に賛成する示威行為」として許可しなかった。さいたま市は憲法 9 条に関する俳句の「公民館だより」への掲載を拒否した。いずれも、賛否の論争が起きていることを理由に市が「中立ではない」と判断したケースだ。

各自治体の判断に、政権が直接介入した形跡はない。しかし、「中立」を理由に、政権の意向に沿わない意見にふたをしたり、政治的に賛否を招きそうな事態は未然に回避しようとしたりする。行政の判断には、そんな「事なかれ」の空気が反映しているようだ。「現状維持志向 支持率下がらず」と、世論の動向にも問題を投げかける。

(2019 年 5 月 24 日)